

# 発想力豊かな書き手にも想像力豊かな読み手にも なれるチェーンストーリーのすすめ

甲斐 順

## はじめに

英語を書くことに対して苦手意識をもつ生徒は少なくありません。積極的に書いてみたいと生徒に思わせることは、教師にとってなかなか骨の折れることです。生徒に前向きに書かせることができる活動の1つに、チェーンストーリーを挙げることができます。チェーンストーリーは、紙と筆記用具さえあれば、生徒が気楽に取り組める活動です。しかも生徒は発想力豊かな書き手にも想像力豊かな読み手にも瞬時にしてなることができるのです。この場をお借りして、チェーンストーリーについて述べさせていただきます。

## チェーンストーリーについて

チェーンストーリーについて、すでに何人かの研究者が発表しています。例えば、Ur & Wright(1992)は、5分間でできる活動の1つとしてチェーンストーリー(chain story)を挙げています(p.7)。そこでは過去形を使って物語ることと記されています。この活動は、教科書の数行であったり、教師の即興であったり、あるいは生徒にお願いしたりして、物語の冒頭部分を示すことから始まります。それに続けて、教室内で個々の生徒が短い文をつけ加えていきます。

Magee(1993)では、4、5人の生徒が輪になって、各生徒が紙に最初の文を書き、別の生徒にその紙を渡します。受け取った生徒が第1文に続けて話を書き、その紙をさらに別の生徒に渡すということを繰り返していきます。このパターンは、第1文を書いた各生徒の手元に紙が戻るまで続きます。全く異なるチェーンストーリーが数多く作られ、それらは驚くべき、ユーモアに富んだ内容になり、生徒はしばしば大声を出して笑うこともあります。一般的にこの活動に対する反応は熱狂的なものになるそうです。

Magee(1993)が考えるチェーンストーリーの最大の利点は面白いことです。活動の中で生徒は読んだり、書いたり、協力して教え合ったり、修正し、意見を述べ合ったりできます。ライティングに対する不安を緩和し、創造性を促進する肯定的な効果もあると報告されています。

Harmer(2007)は、チェーンストーリーという呼び名ではなく、同じ活動を story circle と呼んでいます。初級レベル以上のどの年齢でも行え、書く習慣を作り上げ、協同作業による物語の創作に焦点を当てて行う活動と紹介しています。また、この活動は楽しく、ライティングの流暢さを伸ばすのに役に立つとも述べています。

チェーンストーリーは、思考力・判断力・表現力・想像力などを育むことができる活動であり、うまく活用すれば4技能(読む・聞く・話す・書く)すべてを伸ばすことも可能な活動です。

## 実践

Magee(1993)では、1人の生徒が書く時間に制限を設ける方法と設けない方法が紹介されています。制限時間を設けることで、紙が1人の生徒のところで滞るのを避けることができます。また、書くのが遅い生徒が、紙を回すのが遅くなって心配したり、プレッシャーを感じたりすることも避けられます。ただし制限時間がある場合、英文を書き終えていてもいなくても生徒は紙を回す必要があります。未完成の文は、紙を受け取った次の生徒が補います。一方、制限時間がない場合、一人ひとりの生徒が責任をもって1文を書き終えることができます。私の実践では、後者の制限時間を設けない方法でチェーンストーリーを行ってみました。書くのが遅い生徒のところで紙が滞滞してしまうような場合には、教師がたまっている紙をその次の生徒に回すことで問題

を解消します。こうすることで手の空いた生徒を作らないようにできます。

実践では、机を移動して輪を作る時間を省くため、窓側の2列、中央の2列、廊下側の2列を1つの輪とみなし、各2列(通常クラスでは合計12～14人、少人数クラスでは合計6～8人)の中で時計回り(または反時計回り)に紙を回し、チェーンストーリーを作るように指示しました。チェーンストーリーを行っている間は、CDで洋楽を流し、心地よい雰囲気を作ります。

1時間近くの授業時間をすべてチェーンストーリーの作成に費やしたクラスもあれば、20分を作成にあて、その後完成したチェーンストーリーを回し読みして、最後によいものをクラス全員で共有できるように発表させたクラスもあります。生徒全員のチェーンストーリーを回収してパソコンに打ち込み、よいものを原文のままコメント付きで印刷してクラスに配布したこともあります。

以下で、現任校の生徒たちが作り上げたチェーンストーリーを3つほど原文のままご紹介します。どのクラスでも第1文は、Once upon a time there was/were のいずれかで始めるように指示しています。

作品1のクラス(高等学校1年生)では、20分程度の時間を与え、10人目の生徒が最終文を書くように指示しました。

(作品1)

1. Once upon a time there was a great big stronger robot.
2. It was broken.
3. The name is John.
4. It was thrown away.
5. Actually, It feels very sad.
6. One day, a scientist found it.
7. He tried to repair it.
8. After the a lot of days, he has finished repairing.
9. So, The robot smiles a lot.
10. And, they lived together happily.

時制の混在、文中での不適切な大文字や符号の使用などが見られますが、ほのぼのとしたよい話にな

っています。

次の作品2は、2列の合計人数が8人しかいない少人数クラス(高等学校2年生)で実施した作品です。最後の生徒が書き終わると紙が1周し、第1文を書いた生徒の手にチェーンストーリーが戻ってきます。

(作品2)

1. Once upon a time there was a dog.
2. The dog likes bones.
3. But the dog had not bones.
4. So the dog was going to go out to look for bones.
5. The dog walked for one hour but the dog didn't see bones.
6. Suddenly, the dog fell in a hole and his eyes found something white!
7. The dog thought it is a bone, but it isn't a bone.
8. And the dog wondered that here were not reality, but here were hell.

ここでも時制の混在などが見られますが、ストーリーがうまく展開しています。

次の作品3も、各グループが6～8人しかいない少人数クラス(高等学校2年生)で実施した作品です。この列の合計人数は8人でしたが、他の列の人数に合わせて6人目の生徒が最終文を書くように指示しています。

(作品3)

1. Once upon a time there was a boy.
2. He looked very happy.
3. But actually he was not happy.
4. Because his mother passed away two days ago.
5. He has promised with his mother that he keep smiling every time.
6. His smile makes people around him happy.

Becauseの文頭使用や現在完了形を使っている点などに課題が見られますが、胸にじんと来る内容になっています。

上記3つの作品に見られるように正確性(accuracy)といった点で課題が見られます。チェーンストーリー活動の途中で文法的な誤りを直し、添削している生徒も見られました。しかし、授業の中で生徒たちはどんどん流れるように英文を読んでは書き、読んでは書いていきます。Harmer(2007)も述べていましたが、この実践を通じて、ライティングの流暢性(fluency)をチェーンストーリーによって伸ばすことが可能であると感じました。

チェーンストーリーを行ううえで気をつけたいことを1つ挙げておきたいと思います。クラスによっては固有名詞(例 そのクラスの中で人気の高い生徒の名前)が登場することもあります。よい人間関係が構築されている場合は問題ありませんが、他人を非難・中傷したり、不快に感じさせるような表現は慎むように事前に指導しておく配慮も必要かもしれません。

#### おわりに

チェーンストーリーが始まって、しばらくすると教室の至る所から笑い声が漏れてきて、時間の経過とともに教室内の生徒たちがいきいきとってきます。教室に40人生徒がいれば、40通りのチェーンストーリーができて上がることになります。チェーンストーリーを聞いたり、読んだりしていると、生徒たちの発想力の豊かさにいつも感心するばかりです。

チェーンストーリーのバリエーションとして、Magee(1993)では、文法中心、語彙中心、話題中心、写真・絵中心のレッスンプランが紹介されています。また、Kai(2006)では、パソコンのワープロソフトとスライドプレゼンテーションソフトを使っ

た実践が紹介されています。

チェーンストーリーでは、生徒は1つのストーリーを読んでは書き、また別のストーリーを読んでは書いていきますから、速読力と速書力、思考力・判断力・表現力などが養成されます。メッセージを読み取って、メッセージを伝えるチェーンストーリーは、コミュニケーションの手段の1つとも言えるでしょう。教室内の全ての生徒がチェーンストーリーライターになることが可能で、発想力豊かな書き手にも想像力豊かな読み手にもなれるチェーンストーリーの実践報告が今後増えていくことを楽しみにしています。

#### 参考文献

- Harmer, J. (2007). *The Practice of English Language Teaching* (4th ed.). New York: Pearson Education.
- Kai, J. (2006). How to encourage second language learners to become creative writers with the help of computers as portfolios. 『英語展望』第113号, 56-65.
- Magee, B. E. (1993). *Chain Stories—A Collaborative Writing Activity* (Master's thesis). Available from ERIC. (ED 408825)
- Ur, P. & Wright, P. (1992). *Five-Minute Activities: A Resource Book of Short Activities*. Cambridge: Cambridge University Press.

(神奈川県立柏陽高等学校総括教諭／日本大学大学院総合社会情報研究科博士後期課程在籍)